

62 大英図書館で新たに発見された、ケンペルによる灸所鑑の翻訳草稿について

ヴォルフガング・ミヒェル

一六九〇年に来日したドイツ人ケンペルはオランダ人テン・ライネに続いて出島商館で勤務する二人目の大卒の医師であり、通常の床屋外科医よりもはるかに広範な医学指導ができる知識人であった。ケンペルの『日本誌』からわかるように、彼は自分の助手今村源右衛門にオランダ語も医学をも徹底的に教えたが、今村は西、檜林などの通詞とは異なり、その生涯を通じて西洋医学への関心を示す記述は残していない。また、長崎や江戸でケンペルと接触した医師たちも、ケンペルの「教え」に関する記録を取ったという形跡はないので、日本の紅毛流医学の発展にはケンペルは何も貢献できなかった可能性は高い。

医学交流の歴史においてはそれよりも日本の鍼灸を西洋で広めた功績の方がはるかに重要視されてきている。東洋医学の「Moxa」については一六七〇年代にバタヴィアの牧師ブショフが初めて紹介し、元出島蘭館医テン・ライネも関節炎へのお灸の有効性を詳細に分析しているが、一七二二年に『廻国奇観』で発表されたケンペルの描写は今村という優秀な通詞がいたためか、以前よりも体系的でわかりやすいものであった。さらに彼は日本で入手した「灸所鑑」という一枚のビラの全文及び身体上の治療点を示す図(坊師)を加えている。これは灸術に関する初めての資料紹介だった。G・シヨイヒツァーは、この記述を、一七二九年にケンペルの『日本誌』に補遺として加えた。一九世紀前半までに日本関係の代表的な参考書として利用されたこの『日本誌』によってケンペルの「灸所鑑」はさらに普及し、ヨーロッパ中の注目を浴びるようになった。

一七一五年までケンペルの書齋にあった「灸所鑑」の原本はその後行方不明になった。また、日本国内の調査によりそれと似た資料が出たが、「灸所鑑」の名称を示す

ものは今日までは報告されていない。そのためにロンドンのケンペル資料中に発見した「灸所鑑」の翻訳草稿の意義が大きい。この資料を分析すると、ケンペルの理解上の問題点が見えてくるし、一七二二年に発表された「灸所鑑」のラテン語訳及びそれに基づいて作成された英語、オランダ語、フランス語やドイツ語版の誤りも確認できる。

(九州大学大学院言語文化研究院)